
エデン～創造と破壊～

近山 流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデン〜創造と破壊〜

【Nコード】

N1143BA

【作者名】

近山 流

【あらすじ】

世界線の移動によってパラレルワールドに飛ばされてしまった少年。
彼はその世界にどのように関わっていくのか……

ジャンルは主人公最強ハーレムと、王道ですが、私が1番好きなジャンルだったのでチャレンジしてみました。

勢いで書きはじめてしまった小説で駄文ですが、がんばっていくので、是非アドバイスお願いします。

設定など（前書き）

まずは、設定です。

設定など

主人公

リョウ・エンドウ（15）

大規模な世界線の移動によりパラレルワールドに飛ばされてしまった少年。

能力

創造と破壊

具体的な内容は本文で

世界設定

科学ではなく魔術が発達した世界で、今だほとんどの国が民主制ではなく王制となっている。

魔法について

火・水・風・雷・土の基本属性に光・闇の上級属性、そして、氷・炎などの派生属性などがある。

属性の中にも下位魔法、中位魔法、上位魔法、特位魔法がある。

光・闇の上級属性は基本属性と違いランクが一つずつ上になっていて、上級属性の下位魔法は基本属性の中位魔法にあたる。

設定など（後書き）

不定期更新ですが、頑張っていきたいと思います。
基本属性に風を追加しました。

パラレルワールドへ(前書き)

まず第1話です。

パラレルワールドへ

その日、この世界から遠藤亮という存在が消えた……

「ここはどこだ？」

リヨウは周囲を見渡す。

そこはみられない森だった。

彼はさっきまで家への帰路を歩いていたはずだ。

しかし全く検討がつかない状況に立たされたにもかかわらず、彼の精神はいたって普通だった。

これは、彼の適応能力が凄いということではない。彼はまだ完全にはこの状況を理解できていないのだ。

「とりあえず情報収集だな、移動しよう」

その時だった。彼は生まれてはじめて、命を脅かすほどの脅威を感じた。

パラレルワールドへ（後書き）

初めて小説を書いてみましたがいかがだったでしょうか？

是非感想お願いします。

脅威

脅威の正体は体長2メートルをゆうに超える巨体を持ち、その巨体に見合うほどの大きさの強靱な爪を持つ熊だった。

リョウは生まれてはじめて心の底から恐怖した。

彼は今まで日本という平和な世界で命の危険などとは無縁な生活を送っていたのだ。

少なからず自分を守るすべを知っているとはいえ、目の前の脅威を排除できるほどのものではないし、その前に恐怖で動くことができなかった。

熊の腕が振り落とされる。

恐怖で固まる体を無理やり動かし攻撃をкаろうじてよける。

ぎりぎりかすってしまった爪により服が軽く破れ、さらにその反動によって大きく吹き飛ばされてしまう。

泥だらけになり息も絶え絶えの体でリョウは思う。

「せめて何か武器があれば…」

その時彼の頭によぎったのは、彼がよく遊んでいるアクションゲ

ムで愛用している太刀だった。

そしてそのイメージは彼の中でしだいにより強固な物へと変わって
いく・・・・

熊がその腕を大きく振りかぶったその瞬間、

彼の能力は開花した。

脅威（後書き）

2話読んでみた感想は……短い？

こんな短かったっけ……

これからどんどん長くしていくつもりです。

感想お願いします。

熊との戦闘の描写を少し編集しました。

開花（前書き）

今回はかなり頑張った。

開花

彼の目の前には、熊に攻撃される直前まで頭に思い浮かべていた太刀が出現していた。

彼は一瞬驚いたものの、目の前の敵を倒すという本能が、理性を吹き飛ばした。

振りかぶられた熊の腕を太刀で切り上げる。

熊の腕からは決して少なくない量の血が流れているが、気にしている様子はない。

しかし、突然の獲物の反撃により、熊の動きが一瞬とまった。

リョウは立ち上がり、己の限界を超える速さで切りつける。

その太刀筋は決して良いものではなかった。

小学生が行うチャンバラのように、型なんてものは全くない。

ただ、チャンバラと決定的に違うことがある：それは、純粹な殺意、己の命を脅かすものを排除しようとする明確な殺意だ。

しかし、致命傷を与えることはできず、熊は体制を立て直してしま
った。

所詮は非力な人間だ。熊に腕力で叶うはずもない。
たった一撃で太刀は吹き飛ばされ、リョウも弾き飛ばされた。

「ぐはあ」

5メートルほど吹っ飛ばされ、口から空気と一緒に血が吐き出され
た。

ここで死ぬのか？

こんな訳の分からない場所で、誰にも知られずに？

そんなの嫌だ。

まだ俺は死にたくない。

やりたい事がいっぱいあるんだ。

彼の思考はそこまでいったところで急激に冷やされていった。

彼の中に眠っていたあふれださんばかりの膨大な力がついに発動し
た。

その力は彼の中から溢れだし、周囲にも影響を与えている。

彼を中心に風が吹き出されている。

熊は野生の本能で危険を察知した。

だが、もう遅い………

彼は目の前の脅威に向けて短く言い放つ。

「死ね」

その瞬間脅威は跡形もなく碎けちり消滅した。

そして彼は意識を失った。

開花（後書き）

感想よろしくお願いします。

脅威は去って（前書き）

5話です

脅威は去って

「……………う……………いき……………て……………る？」

そうだ、熊は！

慌てて周囲を見渡す。

しかし、周りには太陽の光を隠すほどに生い茂った木々以外なものもない。

そして彼は思い出した。

熊を殺したことを、自分の中に溢れ出した不思議な力のことを……

一体なんだったんだあれは？

最初に起きた、自分が想像していたものが実際に現れたこと

そして、彼が強く念じた瞬間熊が跡形もなく消滅したこと

まず最初に考えることは、最初に起こったことだ。

試しに強く念じてみる。

「火を」

瞬間ボツという音と共に、掌から火が出現した。

なるほど、念じることで、無から有を作り出す。

まるで神の力だな。

そう皮肉げに笑ってみる。

己の想像の範囲で、戦術が無限に広がる。

確かに凄い力だ。

だが、たった火を出すだけで体力をほとんど使ってしまうようだ。
改善の必要があるな。

これから楽しみだ。

彼はニヤリと笑う。そこには恐怖に震える男の姿はもうなかった。

脅威は去って（後書き）

旅立つのはもうちょっと先だと思います。

今回は読みやすいように一文一文間をあけてみたんですがどうでしたか？

感想お願いします。

次回はリョウの能力が少し分かります。

能力（前書き）

連続投稿♪

能力

あれから半年がたった。

「今日はこんなものか」

そこにはあの日出会い、リョウの心に初めて本当の恐怖を与えた巨爪熊の死体が三つ転がっていた。

自分の能力を把握し、実験し、マスターするまでにかなりの時間が経っていた。

リョウは想像したものを出現させる自らの力を

「創造」の能力と名づけた。

安直だが、一番この能力のことを表していると思ったからだ。

さらに、実験をしていく中で創造の能力にはいくつかの制約があることに気づいた。

まず、この世の理に反することや、動物、虫、植物などの生物は創造することはできないということ。

それは逆に、生物でなければなんでも創造することができるということだ。

しかし、それにも制約は存在する。

- ・創造したいものを明確にイメージすること

これは簡単なようで意外と難しい。

細部まで細かくイメージしなければいけない。

そうしないと、不完全な形で出現したり、武器であれば強度が全くなく、触っただけで壊れるなどの状況に陥ってしまう。

これをクリアするために三か月もかかったのだ。

そして、

- ・イメージする長さ、質量によって疲労度がどんどん上がっていくこと

創造の能力を練習するにあたり、最初は何度もぶっ倒れた。

多くの敵（後にそれは魔物という存在だと知る）に囲まれた中で、危うくぶっ倒れそうになったり、何度死を覚悟したか数えきれない。

そして、幾度となく死の危険に苛まれながらも、イメージの効率化をはかり、今では簡単な物だと一秒以内に、難しい構造のものでも、かかって十秒という驚異的な速さで作り出すことができ、かつ、いまだ時間短縮が行うことができている。

さらに、何度も練習したことにより、力（主に精神力）を効率良く使うことにも慣れてきている。

長かったなここまで

そうして苦笑したところでリョウは何者かの殺気を察知した。

森のなかでの安心できない生活、そして度重なる殺気に身を晒していたリョウの感覚は限界まで研ぎ澄まされている。

やろうと思えば、半径1キロ圏内の生物反応、殺気を感知することも可能だ。

リョウが感知したのはかなり大きい生物反応

すぐさま、彼は念じる

（サーチ）

その瞬間彼の前にはレーダーのようなものが出現した。

すぐさま、その反応に向けて、レーダーをとばす。

この機械はレーダーにぶつかった物を画面に写しだす事ができるというものだ。

しかし、いつまでたっても、画面には何も映らない。

故障なんてことはありえない。

どういうことだ？

リョウは首を傾げる。

その瞬間、リョウは右上方からの殺気を直感で察知し、何も考えず左側に大きく跳ぶ。

ズダーン！！

何か巨大な物が空から降ってきた。

思考が追いつく、何だ一体！？

砂埃がはれ、そこに姿を表したのは、全長2、3メートルもあるかと思われるほど、巨体を持った狼だった。

「我は天狼なり、
汝は強者たるものか？」

能力（後書き）

……書き溜め全部出しちゃった

考えなしとか言わないの！

ついにハーレム構成員の一人が登場！！

ドンドンパフパフ

………古いかな？

てなわけで、次回予告、

リョウの前に現れた伝説の生物「天狼」

リョウVS天狼

勝つのはどっちだ。

次回は戦闘回、頑張ります。

では、感想お待ちしております。

1月4日

修業期間を一年から半年にしました。

V S 天狼 1 (前書き)

予想以上に長くなってしまったため二つに分けて投稿します。

V S 天狼 1

「我は天狼なり。汝は強者たるものか？」

リョウの目の前に突如現れたものは最初にそう言った。

「お前はなにもんだ？」

リョウは問う。

「天狼と言ったはずだが」

その天狼と名乗る巨大な生物は小バカにしたように言う。

「違う、そういうことじゃない。サーチのレーダーを飛ばしたはずだが、何も反応しなかった。何をしたんだ？」

「レー……ダー？なんだそれは？我はただ走ってここまで来ただけだが」

走って？確かに察知した殺気はまだかなり遠いものだった。だからこそレーダーを飛ばして情報を知ろうと思ったわけだが……………

……まさかリーダーが到達するより速くここまで来たっていうのか！？

うそだろ、信じられない。

だがもしそうだとしたらかなりの、いや、想像を絶するほどのスピードだ。

それにこの森に迷い込んで以来、いろんな獣と戦ってきたが、意志疎通ができるやつに会ったことは初めてだ。このことからかなりの知能の高さが伺える。

これはかなり面倒な敵に会っちゃったな。

リョウは心の中で舌打ちした。

「汝から不思議な力を感じる。もう一度問う。汝は強者たるものか？」

天狼が言った。

「だったらなんだ？」

「我と勝負……いや、そんな生温いことは言わない、さあ殺しあおうではないか」

「何言ってやがんだお前は」

なんだこの威圧感は、他のやつらとは段違いだ。

こいつは危険だ。

リョウの直感は大音量で警報を鳴らしている。

……逃げれるか、こいつと戦うのは絶対にまずい

「いくぞ！」

間髪入れずに狼がとびかってくる。

いきなりかよ。間に合うか……

リョウは内心で毒づきつつ

アクセル

「《加速》!!」

リョウが持つもう一つの能力を身につけるにあたりマスターした力
体全身に溢れている生命エネルギーを活性化させることにより、身体
を強化することができる。

加速は足の生命エネルギーを一気に活性化させることで超速で移動するものだ。

「ほう。私の攻撃をよけるか」

狼はどこか嬉しそうに言う。

（よけなきゃ今頃死んでんだろ）

リョウは心の中でそう毒づく。

「逃げるつもりか？」

「当たり前だろ。お前と戦って確実に勝てるとは思わない。俺は極力無駄はしない主義でね」

「私の速さを前に逃げれると思っているのか？」

そう言った瞬間、狼の巨体はリョウの後ろにあった。

（うそだろ！？何て速さだ）

今日何度目か分からない驚きを口にする。

アイアン

「《鉄壁》！！」

慌てて体全体の生命エネルギーを異常活性させ、肉体を鋼のような固さにする。

ガンッ!!

鉄を叩いた様な音がして、リョウの体が弾き飛ばされる。

「……………くー……………流石にいてえー」

「………私の全力の一撃をくらってまだ生きているのか………身体強化魔法か? ……いや、身体強化程度で我が一撃を防げるはずがない」

ここで初めて狼は驚いた。

「汝は人間か？」

「失礼なやつだな。俺は人間を止めたつもりはない」

（くそ、主義に反するがやるしかないか………死ぬのはゴメンだ）

そして唱える……………

「創造、形状は銃、連射機能付き、弾丸は炎」

まだ、複雑な構造のものは声に出さなければ明確にイメージできな

いのだ。

そしてリョウの手に銃が出現する。

「なんだ？ 召喚魔法か？」

「いいや」

リョウはニヤリと笑い引き金を引く、

ババババババツ

一秒に10発もの速度で炎を纏った弾丸が狼に襲い掛かる。

「ツツツ！！」

狼は己のスピードを駆使して次々と弾丸を避けていく。

しかし、数が多い。

しだいに、避けられない弾が出てきて、みるみるうちに被弾数が増えていく。

「ハハハハハ…いいぞ、いいぞ人間。我が傷を負ったのは何十年ぶりだろうか」

狼は心底嬉しそうに笑う。

「我も全力で行かせてもらう」

狼の口から何十個もの炎弾が発射される。

リョウは銃でそれらを迎撃していく。

「火をはく狼なんて聞いたことないぞ！」

「我はただの狼なんぞではない。天狼だ。こんなものまだ序の口よ」

狼は薄く笑みを浮かべる。

V S 天狼 1 (後書き)

V S 天狼 2は今日中に投稿するつもりです。

感想、評価、アドバイス、質問お待ちしております。

V S 天狼 2 (前書き)

後半戦です♪

VS天狼 2

狼を中心に強力な風が発生し、吹き荒れる。

そしてその風で作ったカマイタチを炎弾と一緒に放って来る。

リヨウは炎弾で迎撃しつつ考える。

（これじゃ消耗戦だ。このままだと威力の低いこっちがやられちゃう……やるしかないか）

「炎龍！！ 水龍！！」

リヨウの左右に炎龍と水龍が現れる。

「中位魔法を詠唱無し、しかも連続でか、ますます面白いのう汝は」

「行け！！」

二体の龍が狼に向かっていく。

龍が激突する寸前、狼は大きく跳び上がり回避する。

その跳躍力は素晴らしいものであり、回避は明白だった。

しかしそれはリョウが狙っていたことだった。

スチームバースト

「《水蒸気爆発》！！」

それは水が非常に温度の高い物質と接触することにより気化され発生する爆発現象

空中にいるため回避ができない狼はその爆発をもろに喰らう。

ドバーンッ！！

狼は先ほどの少年のように大きく吹き飛ばされる。

「……………うう……………全開の風の障壁でも衝撃を殺しきれないか……………」

狼は小さく呻く。

しかし、目には未だ戦闘への意志は残っていた。

（天狼の中でも最速と呼ばれた私の速さについて来ることができ、尚且つ、私の全力の攻撃を受けても死なず、ましてや、私の全力の

防御を優に破壊するほどの攻撃魔法を詠唱なしで行うとは)

「ハハハ…楽しいのう人間!!」

そう言い天狼は己の魔力の全てを牙に注ぎ込む。

リョウは察した。

狼から巨大な力が溢れ出しているのを

恐らく次がこいつの最後の攻撃だ。

ならばこちらも全力で答えよう。

この半年の集大成

創造の力と身体強化の融合技

アイアンメイデン

「《鋼鉄の王》!!!」

外見はただ鋼鉄のアーマーを着ているだけだ。

しかしそれは本来ならば、圧力によって体が潰れてしまってもおかしくはないほどのものだ。

それを身体強化の《鉄壁》によって防ぐことで、絶大な防御力を発揮することができるのだ。

そして、その防御力があって初めて使える技

(炎龍、水龍)

リョウの左右に再び二体の龍が出現する。

お互い準備が整い、片方は脚力で、もう片方は《加速》で一氣に距離をつめる。

「行くぞ！！人間！」

「行くぞ！！クソ狼！」

「《牙狼天晴》！！」

スチームインパクト

「《蒸気爆拳》！！」

強大な魔力で限界まで強化された巨大な牙での一撃

そして水蒸気爆発の衝撃を一箇所に集中させ拳に乗せて放つ一撃（近接打撃攻撃のため、かなりの攻撃力を誇るが、その爆発に自分も巻き込まれてしまうため、無敵の防御力を誇るアイアンメイデンが必要だった）が交差する。

爆風は森全体に行き届き、森は揺れ、森に住まう生物は凄まじい衝撃を感じた。

そして衝撃が治まったとき、満身創痍ながらもそこに立っていたのは、

偶然か必然かパラレルワールドに迷い込んでしまった少年、
リヨウだった。

VS天狼 2（後書き）

戦闘回になってたかな？

あと、読者の皆様にお願いがあります。

今回技をいろいろと出しましたが、《アイアンメイデン》と《スチームインパクト》の漢字表記でいいのが浮かびませんでした。

そこで、この二つの技のカッコイイ厨二ネームを募集します。

いいのがあればすぐに反映させるので、是非お願いします♪

今回、リョウのもう一つ的能力について軽く伏線的なものを入れてみました。

どんな能力か予想してみてください。

ただ破壊するだけっていう能力ではないので……

次回で天狼回は終了です。

投稿は速くて今日の夜、遅くても明日の昼までにやります。

次回予告

天狼をくだしたリョウは天狼に何を言うのか。

そして、天狼は自らをくだした人間に何を思うのか。

感想、評価、アドバイス、質問お待ちしております。

1月8日

一応スチームインパクトとアイアンメイデンの名前決めました。

でももっといいのがあったらそっちにしますので是非考えてみてください。

仲間（前書き）

書けたので投稿します。

仲間

「……………私の負けじゃ、人間。よもや、人間ごときに敗北するとは……………」

「負けだ……………じゃねーよ！！いきなり現れて攻撃されて、殺しあいさせられて、一体何様なんだお前は！」

リョウは怒鳴るがなんともないように狼は言う。

「我は誇り高き天狼じゃ」

「天狼？」

「なんじゃ汝天狼を知らんのか？」

天狼は驚いた顔で言った。

「知ってなきやまずい系の事なのか？」

「まずいというか常識じゃな」

「……………マジか。。俺まだこの世界に来て半年しかたってないんだよ。だからこの世界の事とかなんにも知らないんだよ」

「…ん？……………どうということじゃ？」

リョウは天狼に自分の状況、そして能力などを説明した。

なぜ先程まで敵だったやつに自分の身の上話をしているのかとも思ったが、きづいた時にはなにもかも話してしまっていた。

もしかしたら孤独な生活が続いていたため誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

リョウが一通り話し終えたところで天狼は尋ねた。

「なるほどの……その魔力のようで魔力でない力はそちらの世界の産物なのか？」

「俺にはまだわからん。なんせまだ能力の七割くらいしか解明できていないからな……」

「ところで汝は我をどうするのじゃ？」

「どうするって？」

「我は敗者じゃ。生かすも殺すも汝の自由」

「うーん……」

リョウはしばらく考え、突如目を大きく開いた。

「そうだ！お前俺と一緒に来るか？」

「????」

狼は何をいつてるのか解らないと言うように首を傾げる。

「いやだから、もうちょっと先になるかもしれないけど、いずれは俺もこの森からでていく。そしたら一緒に旅しないか？」

「汝と一緒に旅か……確かに面白そうじゃな。分かった。しかし、もうちょっととはどういうことじゃ？」

「いやね、お前と戦ってみて俺の能力はまだ伸びると思ったんだよ。ちょうどお前もいるし、修行もしやすいと思うからさ」

「ふっ、天狼を倒しておいてまだ強くなれるじゃと？全く汝には心底驚かされる」

「俺はえんど……いやリョウ・エンドウだ。よろしく」

「我はリーズリット・フォン・ワーウルフ、誇り高き天狼の一族じゃ。リズと呼んでくれ。よろしく主殿」

「あ、あるじ!？」

「なんじゃ。問題か？」

「いや、主って」

「天狼にはその強さ故、一度敗北した者には死ぬまで尽くせという掟があつての」

「そんな無茶な……ん?……リズ?偏見かもしれんがやけに女っ

「ばい名前だな」

「何をいっておる主殿、我はメス……いや、女じゃぞ」

「へ?」

そこでリョウの頭は一旦フリーズし、数秒後再起動する。

そして頭に浮かんだのはこの前読んだ小説にでてきた、人に変化することのできる伝説の生物だった。

その小説の主人公はそいつに襲われたが、かろうじてしりぞけその伝説の生物は主人公に忠誠を誓っていた。

（あれ、ここまでほとんど同じじゃね）

最終的に擬人化したら銀髪少女がでてきて、俺はロリコンじゃないと声高らかに叫ぶことになる展開になる気がする。

「リズ」

「なんじゃ? 主殿」

「もしかして人型になれたりする?」

「人化か? おお、できるぞ。じゃが、何故そんなことを知っているんじゃ?」

「いやーあはは」

「そうか、人型になったほうがよかったか」

「え！？ちよっちよっと待っ」

リヨウが言い切る前に、リズの体が輝く。

狼の姿から人型の姿にシルエットが変わっていく。

そしてリヨウの前に現れたのは絶世の美女だった。

輝く銀髪に人形のように整った顔立ち。

そしてその中に明朗さを含んでいる。

リズの性格通り、活発そうな美女がそこにいた。

さて問題の体格だが、身長はリヨウより頭一つ低いぐらいで、恐らく160後半だろう。女性の平均身長くらい、もしくはちよっと大きいぐらいか。

そして、貧でもなく巨でもない絶妙な大きさの二つの膨らみ

そこに「幼」という要素は微塵もなかった。

リヨウはなんだか拍子抜けした気分だった。

一旦思考を落ち着かせたところで、重大なことにきづいた。

リズが全裸なのだ。

当たり前だ。

服なんて着てるわけがない。

冷静に考えればすぐに分かったことだ。

だが、それにきずかなかったというのは、よほどテンパっていたのだろう。

リヨウも元の世界では健全な男子高校生だったのだ。
そっち方面への興味は多大にある。

しかし、悲しいかな、女性経験が少ない純情少年には急なアドリブに対応するだけの技術は無く、目の前の光景に脳が処理落ちし、シヨートしてしまう。

目をそらしながらも創造によって服を作りリズに投げつける。

「ほーホントに便利じゃのうその力は」

リズが感心するように、そして面白そうに言う。

ようやく脳のシヨートから復帰したリヨウは尋ねる。

「なんだか普通だったな。幼女かと思った」

「なに？ 幼子のほうがよかったのか？ 一応我は主殿の年齢と同じ年齢の体格にしたのじゃが………主がそちらのほうがいいのであれば変えようかの？」

「いやいやいやいや。大丈夫。問題ない」

変化しようとしたリズを慌てて止める。

そうしながらリヨウは思う。

これからにぎやかになるな……

一人の時には感じなかった人（明確には人ではないが）と話す嬉しさが心にしみた。

最高の出会いだったな……
リヨウは嬉しそうに笑った。

仲間（後書き）

リヨウはまだ強くなります。

次回はこの世界の具体的な説明を入れるつもりです。

誤字訂正しました。

次回で旅立てるかな～

次回も頑張ります。

投稿はできるだけ早くするので

では、

感想、評価、アドバイス、質問お待ちしております。

リズムの口調を変えました。

世界そして旅立ち（前書き）

かなり長文になっちゃいました。

世界そして旅立ち

お互い落ち着いてきたところでリヨウはリズに尋ねる。

「リズ、早速だけどこの世界について教えてくれないか？」

「わかった、主殿。だが我も長きに渡り天界にいた身じゃ。普遍的なことなら分かるが、現代のことはあまりよく知らんぞ」

「大丈夫だ。知ってる範囲でいいから教えてくれ。他のことは森を出てから考えるから」

「ふっ、いい加減じゃのう、じゃがわかった。我の知っている範囲で答えよう」

「ありがとう。じゃあまずさっき言ってた魔法について教えてもらえるかな」

「ふむ、魔法かの……………」

魔法には、まず火・水・風・雷・土の五つの基本属性と光・闇の上級属性があつての、体内にある魔力という力を燃焼させることで、いろいろな現象をおこすというのが魔法じゃ」

「じゃあ、戦闘の時にリズが放っていたカマイタチや炎弾も魔法なのか？」

「うむ。魔法と言っても下位魔法じゃがの」

「下位魔法？」

「魔力の量は人によってそれぞれじゃ。多い者もいれば少ない者もいる。中には魔力を持たないなんて者もいるんじゃない。こればかりは才能故にどうにもならん。

そこでその魔力の使用量に応じてランクが付けられたのじゃ。

まず、魔力を持たぬ者は除くが、誰でも使えるのが下位魔法。

そして、常人以上の魔力を持つ者が使えるのが中位魔法じゃ。中位魔法までを使えて一流というところじゃの」

「なるほどね。だからあの時驚いていたわけだ」

「当たり前じゃ。中位魔法を詠唱しなんてどんな化け物かと思っただわ。実際は違ったようじゃがの。

まあいい。ちょっと話が脱線してしまったがの。

そして王宮魔術師などのエリートが大人数集まってできるのが上位魔法じゃ。

あとは、各属性に一つずつしかないと言われている特位魔法。古代魔法とも言われておる。これはどれもが戦略級の大魔法での、王宮魔術師が200人以上集まって初めて発動できる魔法じゃ。

これは基本属性の場合で、上級属性になるとランクが一つずつ上がっていく。上級属性にも古代魔法があるにはあるのだが、未だ成功したことはないらしいのう。だから上級属性での上位魔法が特位魔法にあたるというわけじゃ」

「戦略級魔法か……………」

「どうした？主殿」

「いや、どんなものかがわかれば創造の力で俺にもできるかなと思
って……」

「ふふ、確かに主殿ならできそうじゃな」

「他には魔法のことで何かあるか？」

「そうじゃの………あっそうじゃ。まだ派生属性と身体強化
魔法について話してなかったの」

「なんだそれは？」

「まず派生属性じゃが、基本属性の進化系とっておいて問題ない。
有名なところで言うと、炎や氷とかかの。

ランクは上級属性と同じじゃ。

あと身体強化魔法だが、これは魔力で鎧をつくるようなものだ。

しかし、魔力の消費は激しいし、強度もイマイチで使う者はほとん
どいないようじゃがの…

魔法といったらこれぐらいかの」

「なるほどな。結構いろいろあるんだな」

リヨウは顔をしかめ、その後苦笑する。

「できるだけわかりやすいように説明したつもりじゃがの」

リズはそんな顔をしているリヨウを見てニヤリと笑う。

「他には………例えば種族とかは？もしかしてエルフとか獣人とか
もいるの？」

「いるぞ、よく知っておるではないか」

「こっちの世界にもそういう小説があるからな」

「しょ、しょうせつ？」

「うーん……文献みたいなやつだ」

「ほう。文献、小説か……読んでみたいのう」

「他にはどんな人種がいるんだ？」

「うむ。」

まず人間族・エルフ族・獣人族が三大種族じゃ。他にもドワーフ族や亜人などの少数民族がおる」

「それぞれ特徴とかあるのか？」

「人間族はわかるじゃろう。」

エルフ族はとても長寿で耳が長く尖っているのが特徴かの。先天的に魔力量が多く、ほとんどの者が魔術師じゃ。

獣人族は名の通り獣の血を受け継いだ種族じゃ。高い身体能力を持ち、全体的に毛深いのが特徴かの。まあ三大種族は見ただけでわかるじゃろう。

我が知っているのはこれぐらいかの」

「ありがとう。他の事は森をでてから人に聞いてみることにするよ。あとさ…話は変わるけどこれからしばらく修業するつもりなんだから手伝ってくれるかな？」

「もちろんだ。主の力には我も興味があるからの」

「ありがとう。じゃあ改めてよろしくね、リズ」

「我が手伝うからには死ぬほどやらせるからの、覚悟しておけよ主殿」

「げ……………まあおてやわらかにたのむよ」

――――半年後――――

「そろそろ修業も終わりかな」

「よもや、我が手も足もでないとは……………」

そこには、1ミリの疲れも見せず佇む青年の姿と、満身創痍で倒れている体長2、3メートルほどある狼の姿があった。

リヨウは半年たち、背も伸び180に届くかどうかになり。顔も幼さにどこか凛々しさを含んでいる。

リカバリー

「《治癒》」

そう言うと、リズの傷がどんどん治っていく、そしてあっという間に完治してしまった。

これは、リョウが持つもう一つ的能力《破壊》の技の一つだ。

《破壊》の能力……それは簡単に言うと、生命エネルギーの操作だ。

今はそれによって、リズの生命エネルギーを活性化させ傷を治した。

一見、無敵に見えるこの能力だが創造と同じように制約がつく。

他人の生命エネルギーを操作するのは自分の生命エネルギーを操作するのに比べ大量の力を使う。

そして、創造の力が生命体に干渉できないように、破壊の力は非生命体には干渉できない。

「ありがたいの、主殿。それにしてもいつ見ても素晴らしい速さじやのう」

「そうかな」

リョウは照れたように笑う。

「それにしても、そろそろ森が出るかな。充分力はつけたし、これからは森の外の世界を見てみたいからな」

「いきなりじゃな。

でもそうじゃの。それもいいじゃろう。

それに天狼相手に傷一つつかないんじゃ。それだけ強ければ大抵のやつは瞬殺じゃろ」

「瞬殺かww」

リヨウは苦笑する。

「で、いつ出発するんじゃ？」

「うーん。できれば早いうちに行こうと思う。リズはどうする？」

「もちろん行くぞ。何を言っておる」

リズはちよつと怒ったように言う。

「ごめんごめん。じゃあ食料とか必要なもの集めて2日後出発するか」

かくして、数ヶ月後、全大陸中に名を轟かせ、大陸中をひっかきまわすことになる青年の旅がはじまった。

それものなんとも適当な感じで……………

第1章 旅立ち 一完 一

世界そして旅立ち（後書き）

ここまで読んでいただいて本当にありがとうございました。

第1章 完と書いてありますが、実はもう1話あります。

リョウとリズの生活をとある一日をピックアップして書くつもりです。

嘘つきと言うかもしれませんが、厳密に言うところの話で第1章は終わりになるので、嘘ではないと思います。

次話はおまけのようなものだと考えといてください。

できるだけ早く投稿するようにします。

今回の話ですが、最後の方が少々強引だったかもしれません。なにかあればアドバイスお願いします。

そして今回、VS天狼のように二つに分けずこんなに長くなったのには理由があります。

それは……

これで10話目なんです！めっちゃ切りいいじゃないですか。
（おまけ入れたら11話になっちゃうけど）

読みにくければ、分けます。二つに（泣く泣くですけど）

それでは次回予告

「少年と狼のとある1日」
です。お楽しみに。

では

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

おまけ 少年と狼のとある一日

リョウ少年の朝は早い。

今日も日が昇り終わる前に起きる。

しかし、今日はずっと違った。

いや、今日からは以前とは違うというのが正解か……

リョウの目の前には銀髪の美女がいた。

……………全裸だった。

sideー リョウー

目が覚めるとそこはパラダイスだった。

「うわぁ!？」

俺は反射的に声をあげてしまった。

だっていきなりだぜ。いきなり全裸の美女だぜ。

TOOぶるじゃあるまいし。モモかお前は!？

今男の夢が目の前に……………いや、夢だな。うん、そうだ。そうに違いない。やっぱりこんなうまい話ないよなゝアハハ

「……うん。どうした主殿」

リズが目を擦りながら目を覚めました。

そうだよな。夢だよな。

「おはよう。リズ」

リズは

「おはよう。主殿……………チュ」

おもむろに唇に触れてきた……………自分の唇で……………

流石に無理だった。

脳ガシヨートシマシタ。復旧マデアト10秒……10……9……8……7
……6……5……4……3……2……1……0

復旧が完了シマシタ。

あれ、何今の。気のせい？

やっぱ夢？ そうだよな～～　この世界に来てずっと男一人だったからな～～

もつとみてたいけど、そろそろ起きなきゃな。やることもいっぱいあるし

ためしに頬をつねってみたが、目の前のリズは相変わらず小悪魔的な笑みを浮かべたまま。

あ
つ
つ
つ
れ
れ
ー
ー
？

どうなってんだ？

「主殿どうしたんじゃ？ 具合でも悪いのかの」

そこでようやく俺はきずいた。自分に起こった奇跡のようなことが現実だと……

「なっとなっとなにしとんじゃボケーーーーー！！ いや嬉しいけど、嬉しいけども……なんだかよく分からなくなってきた。旅に出ます。探さないでください」

その時の俺は後から思い出して死ぬほど恥ずかしいほどテンパっていた。

それなのにリズは笑って

「やはり主殿はおもしろいのう」
などとのたまっている。

「なっなんでいきなり。あとなんで！！??」

「我は主に申したはずじゃぞ。天狼は負けた相手に忠義を尽くすと。もう我は主のものだ」

「お……俺のもの？……いやいや、まだそういうのは早いと思います。まずはお互いのことをちゃんと知ってからじゃないと……」

自分でも言葉がだんだん尻つぼみになっていくのがよくわかった。

「主はうぶで可愛いのう。我がいろいろと教えてやるからの。楽しみにしておくがいい」

そんなこんなで俺の慌ただしい朝は終わった。

疲れた。もう瀕死状態だよ。。。

「あの時はほんとびっくりしたよ」

「ふふ、主はうぶじゃからのう」

あの日から朝は毎日のようにキスで始まってしまったため、もう慣れてしまった。

今では、戸惑うことはなく役得だなあなどと感動している。

「いや、でももっと大変だったのはその後だよ」

「その後？ 我何かしたかの？」

「あれだよ。朝の食料調達しに行った時、リズもついてきたから森の動物が怖がって全員逃げちゃったじゃん。そのせいで朝飯抜きだったんだぞ」

「それはしょうがなかろう。良いではないか。それからについて行かなかったんじゃないから」

リズが膨れてる。

話は逸れるが、今リズは人化した姿でいる。

銀髪の美女が頬を膨らませている……………カワイイ……………ギャップってやつ？何のギャップか分からないけど……………なでなでしたい。すごいなでなでしたい。
狼の状態で柔らかい毛皮をもふもふするのもいいけど、やっぱりこっちも捨て難い……………

「どうした主殿。息を荒げて……………目も軽く逝っておるぞ」

リズがジト目で見ている。

カワイイな……………なでなでしたいな……………

はっ！！今俺は何をしていたんだ。恐るべし、美女の魔力、これがチャームというもののなのか？

危なかった。もう少しで人して守らなきゃいけない一線を越えるとこだった。

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…ぜえ」

「……………」

リズがなんだか可哀相なものでも見るような目で見てくるんだけど、気のせいだよね。

「今思えば、この森にもいろんな思い出があったな。明日出発となると、少し寂しくなるな」

「そうかの？まあ我は主殿と一緒にあればどこにでも行くがの」

「食料もたんまり持ったし、明日に備えて寝るかな。寂しいけどなんだか遠足前夜な気分だから寝れるか分からないけど………とりあえずおやすみ」

「…遠足とな？」

なんかりズが言ったようだがよく聞こえなかった。

明日から楽しみだな。

おまけ 少年と狼のとある一日（後書き）

題名の通りになったかな？

今回はおまけなので一人称に挑戦してみました。

これで1章はほんとに終了となります。

第2章はいろんな人との出会い、そして武闘大会について、あといろいろな伏線をいれられたらなと思っています。

では

感動・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

現実（前書き）

書き上がりました（＾０＾）／

現実

今、リヨウとリズは空を飛行している。

「ホントに便利じゃのう。その能力は」

「そうかな〜そうでもないぞ」

「じゃが風の中位魔法をこんな楽に使えんとは」

リヨウは創造の能力で翼を作り、リズの飛行のアシストをしている。

ちなみに、今リヨウはリズの背中に乗っている。

「そうかの〜、ん？」

「どうした？」

「いや、たいしたことではないのだが」

「ん？」

「娘っ子が男達にかこまれておるの〜あれは盗賊じゃな」

「……全くたいしたことじゃなくねーよ!!
どこだ!!それは？」

「うん？そうかの？」

「ここから3キロ南じゃ」

「わかった。すぐにそこまでいこう。」

「主が言うのであれば我は従おう」

「ついたぞ」

「ありがとう、リズ。ここで降ろしてくれ。一応リズは人化し
て。で、あの女の人のこと頼むわ」

「了解じゃ」

「じゃ、いくぞー！！」

リヨウはリズの背中から飛び降りた。

――side レナ――

私はCランクの冒険者だ。

今回は依頼を受けてギルドで会った数人とパーティーを組み討伐クエストをしていた。

だが、討伐を終えた後の夜の食事で私は痺れ薬を盛られてしまった。そいつらは主に人身売買を専門としている盗賊と繋がっていたのだ。

私は自慢する訳ではないが、比較的顔立ちは整っていると思っている。

街で声をかけられたことだって何度もある。だから目を付けられたのかもしれない。

幸い、飲んだ量が少なかったため、完全に動けないということにはならなかった。

しかし、反撃するほどの力が残っていなかったため私は必死に逃げた。

それでも、私はついに追い詰められてしまいました。

私は半ば諦めていました。

この中の誰もが私が全力で戦っても勝てるかどうか分からないほどのてだれでした。

この後私はどうなるのだろう。

そのことを頭の中で何度も考えていました。

その時でした。。。

何かが空から降ってきた…………

——side out——

「いよつと」

すたっ

リヨウは地面に降りたった。

リズはその間に女の元に向かう。

「あんたら何してんだ？」

リヨウは男達をかるく睨みつつ聞く。

「なんだ？小僧、お前のようなやつが首を突っ込めるようなことじゃないぞ。怪我したくなかったら大人しく帰れ」

「テ、テンプレ！？」

「あん？」

「いや、何でもない」

リヨウが少し引いたことで、盗賊達は自分達が優位に立ったと思ひ込み、リヨウのことを完全に舐めていた。

「おいおい小僧、はやく逃げな。あつてもそっちの姉ちゃんは置い

てけよ」

盗賊はリズを見て下品な笑みを浮かべる。

「うーん。何をしてるんだって聞いたんだが」

「あん？舐めた真似してんじゃねーぞ!!」

盗賊はリヨウに怒鳴る。

そこで盗賊のリーダーのような男が言う。

「お前に答える義理はない。早く立ち去らないと殺すぞ」

「リズ、その人話せるか？」

「おう。だいたいの話は聞いたぞ。

そいつら、人身売買を専門としている盗賊らしい。この女は今奴隷にされかけてたらしいのう」

「へー、ほんとなのか、その話は」

リヨウは睨む。

しかし盗賊達は何も答えず、悪びれたそぶりを1ミリも見せない。

「オッサン達、悪いことは言わない、下がってくれないかな」

「調子に乗るなよ」

盗賊のリーダーは凄みをきかせる。

「あのさ。ちょっと話をしようか。」

人間っていうのはね、大義名分さえあればなんでもできるんだよ。戦争だって略奪だって・・・殺しだってな

俺は自分からお前達を殺すつもりはない。だが、もし襲ってきたら、容赦なく正当防衛を発動するぞ」

リョウから凄い威圧感を受け、盗賊達はたじろぐ。

「おいてめーらなにびびってる、相手はガキだぞ」
リーダーが言う。

「そ、そうだぜ。相手はたかがガキだ、それに武器だって防具だって持ってない、完全に素人だ。すぐにでも殺せるぜ」

盗賊Aが言い、再び他の盗賊達も次々と下卑た笑みを浮かべはじめる。

「もう16だぜ。ガキじゃないですよ。
それに武器ならありますよ」

バカにしたように言うリョウの手にはいつの間にかには短剣が握られていた。

「そんな短剣でなにができる」

「そんな短剣とは失礼ですね。これさえあれば楽勝ですよ。だから悪いことは言わないんで退いてくれませんか」

「舐めてんじゃねーぞ。糞ガキがアアアアア」

キレた盗賊の一人が剣を抜いて向かってくる。

「逃げて！」

後ろの女の人が出た。

だが、その盗賊は止まらないし、リョウも逃げるそぶりを見せない。

「死ぬエエエエエエエエエ！」

盗賊が剣を振りおろす。

しかし、すでにそこにはリョウの姿はなかった。

リョウはその盗賊の後ろにいた。

「へ？」

盗賊は疑問の声を上げる。

その瞬間盗賊の右肩から大量の血が吹き出す。

「ぐあああああ」

盗賊は肩を押さえて悶え転がる。

「これが最後の忠告だ。ひけ、そうしないと殺すぞ」

「慌てんなてめーら!!」

所詮はガキだ。こっちは20人以上いるんだぞ、全員でかかれば問題ねえ!!」

いくぞてめーら!!」

「「「うおおおおお」」」

アクセル

「はあゝ《加速》」

たった一瞬、たった一瞬で5人もの盗賊の頸動脈がかっ切られた。

加速は破壊の能力の一つであり、今の加速は半年前リズと戦った時のとは違い、一瞬だけでなく、常時発動できるようになっている。

さらに加速のスピードは以前より速く、常人には視認することすら難しいものになっている。

「分かっただろ。お前達程度じゃ俺に傷一つ付けられない。俺は人間相手でも容赦しないぞ」

「頭!どうします!?

こいつバケモンですよ!!」

「うるせえ、ここまで苦勞して下準備したんだぞ、ここまできてこんな上玉逃せるかよ!!」

「まったく分からない人ですね。俺もできれば人殺しなんかしたくないんですよ。あなた達が去ってくれればとても平和的な解決がで

きると思うんですが…」

「うるせえ!! こっちは仲間が6人もやられてんだ! ランド盗賊団のメンツをかけて、てめえを殺すまで引き下がれねーんだよ!!」

「はぁゝ後悔しますよ」

「んだとコラァ!!」

リーダーがそう言って、こちらに向かってきたところでリヨウは右手を向ける。

その瞬間、リーダーの右腕が……………

爆ぜた。

「ツツツ!!」

想像を絶するほどの痛みに声もでない。

「主殿、そいつらは生かしておいてもいずれ我らに牙を向くじやろう。主のいた世界はどうだったかは知らん。じゃが中途半端はやめろ。殺すなら殺せ。この世界で生きるていくならそれを忘れるな」

「…………うん。リズ、分かった。この世界は日本とは違う。この世界で生きるなら腹くくんないよね」

そう言ってリーダーがやられ、ようやく逃げようとしていた盗賊共

に手に向ける。

「《獄炎》」

その瞬間、盗賊達の体は火に包まれた。

そして、火が消えた時あったのは、元々は人の形だったのであろう。
灰だけだった。

現実（後書き）

今回はバトル、そして二人目のヒロインの登場といろいろぶち込みました。

盗賊とのバトルはこの手のジャンルの小説ではテンプレ化してます。

でも、私は盗賊との戦闘に「ただ私が書きたかった」ということ以外にちゃんと意味をもたせています。

それは、サブタイトルにもあるように「現実」です。

平和な国とは違い、殺さなければこっちがやられるということ、昔と違い自分の命を守らなきゃいけないということを主人公に知ってもらうために書きました。

まあリズが言ってたことですね。

若干ずしつとした話をしてしまったところで次回予告します。

今回は二人目のヒロイン、レナを加えて進んでいきます。

また世界設定回かも…………

国とか金とかギルドとか…………

もうすぐ冬休みがあけて冬休みあけテストがあるのでその勉強のため投稿スピードが落ちるかもしれませんができるだけ早く投稿するようにします。

では、

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

レナ（前書き）

ヒロイン二人目登場！！

レナ

――side レナ――

信じられない。

たった一人であの人数を倒してしまった。

最初、空から人が落ちてきた時、私は助かったと思った。

でも、それがおそらく私よりも幼いであろう少年だったと知って、その思いは絶たれた気がした。

そして逆にあきらかに私より弱そうなその少年が盗賊達に食ってかかるのを見て、私は恐怖した。

私を助けようとして、もしその人が死んでしまったら、私は罪悪感で生きていけないだろう。

だから私の元に来たおそらく少年の仲間であろう銀髪の女性にひたすら言った。

「無理です。あいつらには勝てません。私を置いて逃げてください」

と、

自分でも信じられなかった。

さっきまで自分が助かるために脳が焼き切れるくらい考えていたのに、何故かその時は自分の事じゃないように思えたのだ。

でも私の必死のお願いにも、女性はまだニヤニヤと笑い、まあ見ておれ、と言うだけで、私の疑問の眼差しにも全く答えようとしなかった。

そうこうしているうちに、盗賊団の一人が少年に剣を振りかざして向かっていった。

私は痺れる体を必死に動かし「逃げて!!」と声の限りに叫んだ。

盗賊が少年に剣を振り下ろしたのを見て私は咄嗟に目を背けた。だが既にそこには少年の姿は無かった。

そしてその盗賊が間拔けな声を出した瞬間、肩から血が吹き出した。

それからは私は唾然としっぱなしだった。

少年の姿が消えたと思うと、盗賊団の5人が吹き飛び、更には私とパーティーを組んでいた団長すらも手も足もでなかった。少なくともCランクの実力はあるはずだ。それをいとも容易く……私はその少年に強い興味を持った。

そしてあつという間に盗賊団は壊滅してしまった。

たった一人の少年の手によって……………

「ふう〜終わった」

リョウはそう言いながら、リズと女性の元に向かう。

「大丈夫でしたか？」

「はい！！大丈夫です。助けていただいてありがとうございます」

「だから言ったであろう。何も心配することはないと」

「なにがだ？」

「この娘っ子が主が弱そうだと心配しての〜」

「！？」

いえ、そういうことでは！！」

その女性は焦って言う。

「あはは、まあいいよ。それより名前は何て言うの？俺はリョウ。」

「我はリズじゃ」

「わ、私はレナです。それよりさっきのは何なんですか？」

「えーと、さっきのは……………あはは…」

リヨウは煮えきれないように答える。

（どうしよう。流石にむやみやたらに能力のことは話さないほうがいいよな）

「ただの魔法じゃよ」

リヨウが悩んでいるとリズが答えた。

「いや、でもただの魔法であんなこと……」

「そ、それよりさ。動ける？」

リヨウの強引な話題転換にレナは一瞬ムツとするが、すぐに答える。

「すいません。痺れ薬を盛られてしまっとうまく動けないんです」

「痺れ薬？ならこれかな」

そう言ってリヨウは小さなかばんから解毒薬を取り出す。

そのかばんはリヨウが創造によって作ったもので、某猫型ロボットのポケットのような構造になっている優れものだ。

そこで、リヨウは改めてレナを見てみる。

流れるような黒髪にそれを栄えさせる白い肌、そして整った顔立ち。身長はリズより少し低いくらいで、胸は大きくはないが、そこまで小さくはない。

全体的にその黒髪もあってスレンダーという言葉が似合いそうな女性だ。

しかし、その顔と身体には所々に腫れや傷がある。

「あとは、治癒かな」

そう言って、レナの傷を治していく。

「っっ！！嘘でしょ！？空間婉曲魔法に治癒魔法なんて、あなた何者ですか？？」

「あー詳しいことは言えないんだ。ごめんね」

リヨウはあつまた話が戻っちゃったと内心後悔しつつ、日本人特有の曖昧な笑みを浮かべる。

「それよりさ、ここから近くに大きな町はある？」

そして二度目は無理かなと思いつつも再びかなり強引な話題転換を行使する。

レナはまたもや不満な顔をしつつも、なんらかの込み入った理由があるのかと思い、どんどん膨れ上がる好奇心を抑えつつ答える。

「えーと、ここから更に南に行ったところにリシュテイン公国があります。」

町と言うよりもかなりの大都市ですけど………」

「いや、大丈夫。ありがとう。もう動けるよね。じゃ、俺達はこれで」

リヨウはこの場を一刻も早く去りたかった。

勢いで助けてしまったものの、能力の情報はできるかぎり流さないほうがいいはずだ。

そしてリヨウはさっきの戦闘でどれだけこの世界の人間と自分の実力が掛け離れているのかを知ってしまった。

しかし、現実はそうは甘くない。

「リシュテイン公国まで行くんだったら、私も一緒に行ってもいいですか？」

「いや、えっと……………」

「まあ、良いではないか主殿。

ただもし主に牙をむくようなことがあれば、我が容赦なく殺すからの」

「えっ……………いえ、大丈夫です。

暗夜族の誇りにかけて、約束はお守りします」

レナは一瞬絶句するも直ぐに立て直して答えた。

「暗夜族か。珍しいのう」

「?? ねえリズ、暗夜族ってなんだ？」

「暗夜族は夜行性の一族での、いつもは洞窟で暮らして外にはでないから、出逢うことはほとんどないのじゃ」

「はい、確かにそうです。でも私は外の世界を見てみたくて故郷を出てきたんです」

「へえ、そうなんだ」

「あ、そうだ。リョウさんは冒険者なんですか？」

「冒険者？ごめん。俺達ずっとここより北の森に住んで、ついさっきそこからでてきたばかりなんだ。だからまだ何にもわかんなくて……」

「ここより北の森って、まさか剣獣の森ですか!？」

「あの森ってそんな名前だったの？
ていうか名前なんてあったの？」

「確かそんな名前じゃったな」

「何だよ。教えてくれれば良かったのに……で、その森がどうかしたの？」

「剣獣は魔獣のなかでも牙や爪が異常に発達した魔獣で、中でも剣獣の森にいるのはほとんどがBランク以上の魔獣なんですよ!」

「そうだったの？」

「……………はあ、もういいです」

全くその凄さがわからず、首を傾げているリョウを見て、レナは呆れる。

「そういえば冒険者とか、冒険者ランクってなんなの？」

「冒険者ですねーギルドに所属し、クエストを受けてお金を稼ぐのを仕事にしている人達のことです。それで冒険者ランクは仕事を受ける資格があるかというふるいのよなものですね。」

ランクは低い順でFから、F＋、E、E＋、D、D＋、C、C＋、B、B＋、A、A＋、S、S＋です。Cランク以上で一流、Aランクにもなると大抵の魔獣は一人で討伐できます。あと天獣とも渡り合えって言われています。

Sランクにもなると一人で王国の軍隊を担えるほどです」

「え!？」

リヨウは驚きの声をあげる。

(リズってたしか天界から来たって言ってなかったっけ……)

「どうしたんですか？」

「い、いやなんでもない。ごめんね。続けて」

「あ、はい。」

S＋ランクは現在世界で4人。そしてその4人は皆から敬意をもって四帝と呼ばれています。この4人が現在、世界最強ですね」

「へえ」

四帝か……会ってみたいな。

ちなみにレナのランクは何なの？」

「私はCです。一応これでも結構知られてるんですよ。」

……そうだ！

もし良ければ私と手合わせしてもらえませんか」

「手合わせ？」

「はい。リヨウさんと一度戦ってみたいんです」

リヨウはちらりとリズの方を見る。

そしてリズの楽しそうな笑みとレナのキラキラした目を見て、しよ
うがないなとばかりにレナに頷く。

「わかった。いいよ、俺で良ければ相手になるよ」

「ほんとですか！？ありがとうございます！！」

目をさらにキラキラさせているレナを見てリヨウは苦笑する。

こうして、リヨウはレナと一戦交えることになってしまった。

レナ（後書き）

やっぱり黒髪ロングが一番いいですね〜

最高です。

この小説を書くにあたり絶対入れたかった黒髪ロングのヒロイン
T O O ぶるの唯を想像していただけたらと思います。

ちなみに人間族で黒目黒髪はとても珍しいという設定なので、レナ
は暗夜族という少数民族にしました。

あと、投稿スピードですが、一応一日一話を目標に頑張っていきま
す。結構長く書けてきたので。

次回予告

レナと戦うことになったリョウ。その勝敗の行方は？

次回「VSレナ」

副題安直すぎるかな……

では、

感想・評価・質問・アドバイスお待ちしております。

相対（前書き）

さすがにVSレナはまんまだったので変えました。

相対

「じゃあはじめようか」

「え？あのリヨウさん武器は？」

レナは自分の愛剣であるロングソードを持っている。

一方でリヨウは何も持っていない完全に手ぶらだ。

「え？」

あー武器か……………どうしよう……………
とりあえずこれかな」

そう言うリヨウの手にはいつの間にか太刀が握られている。

「え！？いつの間に！

まさか召喚魔法！？

ホントにあなたは何者なんですか。。。」

レナは驚き疲れたように言う。

「そろそろ始めてくれんかのう。退屈じゃ」

「……………リズ……………」

レナ、そろそろはじめようか」

「はい！」

では、まいります！！」

レナは駆け出す。

リョウの加速には足元にもおよばないが、それなりに速いスピードでどんどん距離をつめていく。

そして上段からリョウに切りかかる。

しかし、その斬撃はリョウの太刀によって容易く防がれてしまう。

レナは後ろに跳び下がり

「やっぱり流石です。でもなんで盗賊と戦っていた時のようにしないんですか？

手加減はいりません。

本気で来て下さい！！」

と、怒ったように言う。

それに対してリョウは

（流石に、この場で《破壊》を使うのはまずいよな〜〜）

と、返答に困っていた。

そして、

「いや、だって……………」

あれだしたらすぐ終わっちゃうと……………」

と言おうとする。

しかし、その言葉は最後まで言えず、残念なことに逆に火に油を注ぐ形になってしまった。

「つつ!! ふざけないでください!!」

私にもCランクとしてのプライドがあるんです」

レナの剣幕にリョウはたじろぐ。

「わ、わかった。分かったから……
でも加速使っちゃうと………」

そう言った瞬間レナの目の前にリョウの姿はなかった。

そして、いつの間にかレナの首筋には小刀が突き付けられている。

それは加速によって一瞬で後ろに回ったリョウの仕業だった。

「……………こうなっちゃうよ」

「え!?!」

レナは何が起こってるのか分からず、条件反射で声が聞こえた後ろに振り向く。

しかし既にそこにはリョウの姿は無く、もといいた位置に戻っていた。

「で、どうすんの? ていうか、俺それ抜きでも結構強いと思うよ」

さっきのを見せられここまで言われたら引き下がるしかない。

レナは渋々頷いた。

「……………分かりました。じゃあ……無しでお願いします。でも舐められたままです。たまりますか！絶対後悔させてやります」

レナの目がメラメラと燃えている。

「いいよ。返り討ちにしてあげる」

そんなレナの発言をリョウは軽くあしらう。

「いきます！祖は火、我にあだなすものを焼き払いたまえ《ファイヤーボール》」

レナの手から火の玉が発射される。

だが、それはリョウの目の前に突如現れた水の壁に寄って阻まれる。

「え、詠唱なし！？

くっ、なら！

祖は風、我を促進せよ《加速》」

風のアシストを受け、レナは一足で6メートルもの距離をつめる。

そしてロングソードでリョウに再び切りかかる。

リョウはそれに太刀で応戦する。

ガンッ！！

金属同士がぶつかり合う甲高い音が鳴り響いた。

そして、しばらくの間鏢ぜり合いを行う。

リヨウは内心驚いていた。

レナの華奢な体のどこにこんな力があるのだろうか、と

「じゃあ、行くよ！今度はこちらからだ」

リヨウはレナのロングソードを弾く。

そしてレナの頭上に跳ぶ、さらにそこで風の塊を創造し、それを足場に一気に太刀で切り下ろす。

レナは後ろに下がって回避する。

しかし、それはリヨウの予想していたことだった。

再び風の塊を足場に、後ろに下がったレナに突進する。

レナも最初はなんとかリヨウの猛攻を防いでいたが、だんだんリヨウの前後左右、さらに空中まで使った、縦横無尽な攻撃に翻弄され始める。

「…はあはあ……たし…かに…強いです。

私の剣の腕は一族でも1、2を争う程なんですけど……上には上がいるってことですね。

でも、まだです！！」

レナに対してリヨウの力は圧倒的だった。

それでも全く力を使っていないと知り、驚きを隠せない。

しかし、レナにはまだ奥の手があった。

それは暗夜族が先天的に持っている力である。

「祖は闇、我にあだなす者を包みたまえ《闇夜》！！」

暗夜族は先天的に光属性の力を全く持たない代わりに闇属性の力に精通している。

そしてこれがレナの奥の手、闇属性の《暗殺魔法》だ。

「な、なんだ？」

リョウのまわりが闇に包まれる。

何の気配も感じない。

何も見えず、何も聞こえず………まさにそこは闇だった。

「ほう。暗殺魔法か。意外とやりおるのう、あの娘」

闇属性の魔法の最終形態とでもいうもの。

それが暗殺魔法だ。

気配を消したり、影に潜んだり。

いろいろなものがある。

だが、それは決して簡単に習得できるものではない。

闇属性は上級属性であり、なかでも暗殺魔法は闇属性を使いこなせるようにならないからだ。

まさしく奥の手という言葉が相応しいとリズは軽く笑った。

「すげーな。どうすっかな」

リヨウは頭をかきながら考える。

リヨウの様子を見てレナは勝利を確信していた。

さらに暗殺魔法を出した以上負けるわけには行かなかった。

暗殺魔法《闇夜》は闇属性の中位魔法。

殺傷能力はないが広範囲に渡る、隠密能力を発揮する。

レナは走り出す。

そしてレナは背後からリヨウに切りかかる前に言った。

「リヨウさん、私の勝ちです!!」

しかし、絶対的な優位に立ち、勝ち誇りながらリヨウに切りかかったレナの手に手応えが無かった。

「え？」

そこには二人のリヨウと一人のレナがいて、リヨウの体にレナのロングソードが突き刺さり、そのレナの首筋にはもう一人のリヨウの太刀が突き付けられているというなんとも不思議な光景が広がっていた。

「え???」

レナは二度目の疑問の声をあげる。

その瞬間レナがロングソードを突き刺している方のリョウが崩れた。

あたかも自らの仕事は終わったとでも言うように……

呆然としているレナにリョウは言う。

「俺の勝ちだな。」

んで、それは土と水を組

ドール

み合わせた《泥人形》だ」

「!!」

で、でも《闇夜》は私のフィールド。

この空間で起こったことを私が気づかないわけじゃないです!」

「それはね……切られる直前やったからだよ」

リョウはニヤリと笑う。

あまりにも簡単な答えにレナは拍子抜けしてしまう。

「で、でも斬った時も人形意外気配を感じませんでしたよ」

「それはねーこうやったんだよ」

「え、気配が消えた!？」

レナは驚きを隠せない。

闇属性に精通し、気配の察知に関しては一目置かれているレナが気づけなかったのだ。

そこにいるはずなのにそこにいる気がしない。

「そう。これがさっきの

ステルス

答え、《隠密》だ」

そこに突然リョウが現れた。

「す、すてるす？」

闇属性にはそんなもの無かったと思うんですけど……」

「うん。だって闇属性じゃないもん」

「じゃあオリジナル魔法なんですか!？」

「んゝまあそうなるのかなゝ」

ステルス

正確には、《隠密》とは創造によって作られた、姿だけでなく気配まで消せるマントをかぶるだけなんだが……。

創造はイメージさえできれば何でも作り出すことができる。

どんな神懸かった事でも想像できれば《創造》はそれを可能にしてくれる。

(試しにやってみただけど本当に作れるとはなゝ)

改めて《創造》の特異性を知ったりヨウだった。

相対（後書き）

祝！！

8000pv到達！！

1000ユニーク突破！

皆さんここまで読んでいただいて本当にありがとうございました。
これからも頑張っていくので応援よろしくお願いします。

さて、嬉しい報告をしたところで今回の話について、

レナも結構強いんです。

盗賊との一件で弱いみたいなイメージを持たれたかもしれませんが、
残念、レナは強いです。

ですが、暗殺魔法は一对多には向いてません。

それに相手に知られていないことが結構大事です。

盗賊達には知られていたため、（同じパーティーメンバーが盗賊の
仲間だったので）対策などが練られているだろうと思い、自分が完
全な状態でも勝てるかどうか分からない、と濁すような形になっ
てしまいました。

暗殺魔法を抜いた実力的には5分5分くらいです。

と、レナの話を書いたところで次回予告です。

次回

戦闘中、火に油を注ぎまくりレナを怒らしてしまったリョウ。

レナと仲直りできるのか……

世界設定も少し入れます。

勢力図とか……

では、

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

決着、仲間、そしてリシュテイン公国へ（前書き）

だいぶ予告と違くなっちゃいました。

決着、仲間、そしてリシュテイン公国へ

「まっ、そういうことで俺の勝ちだな」

「……………そうですね…」

レナは悔しそうに答える。

「おーもう終わったのか？
暗くてよく見えなかったぞ」

リズは最後が見れなかったせいかな、不機嫌そうでちよつと膨れている。

重い雰囲気が漂っていたので、リヨウは無理矢理話題を持ち出す。

「勝負も終わったことだし、リシュテインまで行きますか

そういえば、レナ、そこってここから歩いてどれくらいなの？」

「2日くらいですが……」

歩いてってそれ以外の方法があるんですか？

レナが疑問の声をあげる。

「リズ、どうしょっか」

「2日だからのう、飛べば1日以内にはつくじやろ」

「そうだね。わざわざゆっくり行く必要も無いしね
じゃありズにまたお願いしようかな」

「うむ。まあいいじやろう」

「え？え？」

飛ぶって一体どういう？」

首を傾げているレナを置いてどんどん話が進んでいく。

「あのう、説明していただいてもいいですか？」

レナが恐る恐るという感じで聞いてくる。

その様子が可笑しくて、リヨウは笑いながら答える。

「言った通りだよ。」

飛んで行くってこと」

「飛ぶ？」

そんなの魔力の無駄遣いですし。それに何に乗って行くんですか？

未だ頭に疑問符を浮かべている隣でそれがどうしたとばかりにリズ
が人化をとく。

リズがいきなり光り目をつぶったレナが目を開けたとき見たのは体
長2、3メートルもあるかと思われる巨大な狼だった。

いきなりの異常事態に目を白黒させるレナ

「どうした？娘

我じゃぞ」

突然狼に話し掛けられびっくりするレナ、しかしその声が聞き覚えのある、というかさつきまでリヨウと話していた声に似ていることに気づく。

「も、もしかしてリズさん？」

「そうじゃがどうかしたのか」

話すことができる知能を持ち、尚且つ人化出来るほどの魔力を持つ狼。

そんなもの一つしかない。

そう。

天界に住んでいるといわれている伝説の生物。

レナの目が大きく開かれる。

「……う…そでしょ。」

リズさん、あ、あにゃたはもS……もしかして…て、天狼！？」

噛み噛みになりながらもなんとか言葉を繋ぐレナ。

「そうじゃが？」

言っておらんかったかの」

「言われてません！！」

ま、まさか天狼に会えるなんて………」

目の前のSSランクの魔獣を見て、レナは驚きを隠せない。

現在もリョウに体を支えられてなんとか立っている状態だった。

「でも何故天狼が人間なんかと？」

天狼は誇り高い一族だ。

人間の下につくなんてありえない。

よっぽどの理由があるのかと思い、なんとか落ち着きを取り戻したレナは聞いた。

しかし、リズの答えは予想の遥か斜め上を行っていた。

「我は主殿に負けてしまったからの、天狼の掟で主に生涯を捧げているのじゃ

かといっても嫌々ではないぞ。

我は主殿の強さに惚れたのじゃ

天狼と真っ向から戦い打ち破った力にの」

リズのその言葉を聞き、驚いたような目で今度はリョウを見る。

「天狼に勝ったんですか？」

「え、まあそうなるかな……………」

「あなたって人は……」

SSランク以上の実力ですよ。それは……！！

ていうか、まだ天狼と戦った冒険者なんていませんよ！
あくまで過去の文献を見て予想された強さでSSランクなんですか
ら！

もしかしたら四帝なみの力かも…」

(やっぱり…)

冒険者ランクの話で薄々感づいていたリョウは心の中で呟く。

だが、何か決心したような顔をしたレナの次の一言はリョウを驚かせた。

「あの、リョウさん

突然ですけど私を仲間にしてもらえませんか！」

ホントに突然だなと思いつつ、リョウは疑問の声をあげる。

「え！？」

「私は外の世界を知りたくて里を出ました。

それに一度あなたに命を救われた身です。

それだけの力を持ったあなたの一生を見届けたいんです。

ダメですか？」

ここでレナの必殺上目遣いがリョウにクリーンヒットした。

リョウはちらりとリズを見るが、好きにせいとばかりに高みの見物を決め込んでいる。

この野郎、後で覚えてやがれと内心毒づきつつ、考える。

（いろいろ知られちゃったからな………
それに結構強いし。戦力と仲間は多いほうがいいよね）

と、半ばいい加減な思考をした後、顔を期待と不安でいっぱいになっているレナに結果を伝える。

「……………わかった。

一緒にいこうか」

レナは顔を輝かせる。

「はい！！

よろしくお願いします！」

リョウの目の前にはこれ以上ないくらい満面の笑みを浮かべたレナがいた。

レナの仲間入りから数十分が経ち、現在、リョウとレナはリズの背中に乗り、空を飛んでリシュテイン公国へと向かっている。

リズの背中に乗ると言われ、顔面蒼白にして、

「そ、そんな恐れ多いことは！」 や、「天狼の背中に乗るなんて！」と慌てふためいていたレナを落ち着かせたのがほんの十分前。

レナは今、

「すごいです！飛んできます。すごいすごい！！」

と、大興奮している。

レナは一通り感動した後、リョウに聞きたかったことを尋ねる。

「そういえばリョウさんっていくつなんですか？」

「16だけど、どうかしたんの？」

「いや、なんか大人びてるな〜って」

「そういうレナはいくつなの？」

「女の人に年齢をきくんですか？」

「え？あ、ごめんなさい」

レナのジト目に思わず謝ってしまう。

「まあいいです。」

聞いたのはこっちですし、私は18です。
里を出てから2年になりますね」

「2年間も一人で旅してたの？」

「まあそうですね。」

仲間になりたいっていうほど信頼できる人は居ませんでしたから」

「じゃあ俺は信頼されたってこと？」

「天狼が懐くほどですもの。」

ある程度は、それに私を救ってくれましたしね。
でもまだ完全じゃないですよ。
そこまで私は甘くありませんから」

と、からからうような口調で言う。

（からかわれているようで結構手厳し言葉だな）

リヨウは苦笑する。

「そういえばリシュテインってどんな国なの？」

「えーと……」

リシュテインはこのユストラシア大陸で一番大きな国です。
貿易も盛んなんですよ」

「へーじゃあ一番最初にその国に行けるのは運がいいってことか」

「はい。それにもうそろそろ武闘大会がはじまりますからね。人も
いっぱい来ますよ」

「武闘大会？」

「はい。4年に一度開催される大会で毎年百人以上参加するんですよ。

優勝者には賞金として金貨100枚と四帝への挑戦券が与えられるんです。

賞金だけでも凄いのに四帝への挑戦券っていう冒険者には最大の名

誉が送られるんですよ!!

そもそも冒険者とはですね……………」

レナが熱く語りだしてしまったところで、リョウは大事な事実気づいた。

「れ、レナ、ちょっといいかな」

「なんですか？」

気持ち良く語っていたところに水を差されたレナはちょっと不機嫌そうに答える。

「あのさ、お金のことを教えてくれない？」

「は？」

あまりにも常識はずれな質問になにか他の意図があるのかと考え始めるレナ。

でもリョウの質問はまんまだった。

「いや、だからお金のことだよ、金貨とか……
ずっと森に住んでたから知らないんだ」

「そうなんですか!?
わ、わかりました」

レナは戸惑いながら答える。

「お金は銅貨1000枚で銀貨1枚、

銀貨100枚で金貨1枚

金貨100枚で白金貨1枚

ってなってます。

それで銀貨1枚あれば一ヶ月は生活できますね」

「なるほど、ありがとうございます。

これから結構頼ることになっちゃうけど、ダメかな」

「いえいえ、ぜんぜん！

どんどん頼ってください」

さっきまでの戸惑いはどこへやら、嬉しそうに笑うレナであった。

この後リズも会話に加わり、楽しい時間はあっという間に過ぎていった。

そして、飛び立ってから約5時間後、ようやく大都市の姿がボンヤリと見えてきた。

決着、仲間、そしてリシュテイン公国へ（後書き）

今回は、決着、仲間、リシュテイン公国へという3話を1話にまとめちゃいました。

それぞれが短かったので……

昨日に引き続き嬉しいお知らせ！

10000pv突破!!

皆さんありがとうございます。

これからもがんばります。

明日から学校なので投稿スピードが落ちると思いますが、なるべく早くするので応援よろしくお願いします。

次回

ついにリシュテイン公国についたリョウ達はギルドに向かう。
そこで一混乱が……

では、

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

ギルド（前書き）

これまでで一番長いです。

ギルド

リシュテインへ向かって飛び立ってから約6時間後……………

「着きました。ここがリシュテイン公国です」

「うわぁ、やっぱり言ってただけあって大きいな」

「リヨウさんはこの後どうするんですか？」

「ん」

まずはとりあえずギルドってところに行って冒険者登録してくるよ。
あといくつか換金して、その金でいろいろ買おうと思ってる。

……………そういえばリズは冒険者登録するの？」

「我か？」

どうしようかのう……………

うーん……その方が都合が良さそうじゃしの

我も登録することにしよう」

「うん。わかった。

じゃあ行こうか」

こうしてリヨウ達三人はギルドへ向かったのだった。

ギルドへの道を歩きながら、リョウはいろいろな店を見ていた。

食料品店から武器屋、雑貨屋など、スーパーのようなものである。

「へー流石に凄い量の店だな」

「そうじゃのう。」

後でたんまり食わせてくれよ」

「お金が入ったらね」

リズのキラキラした目に苦笑しながらとりあえず頷いておく。

そんな風に周囲をきよろきよろと見回して、時々歓声を上げているリョウとリズを見てレナは笑って言う。

「ほらほら、早く行きましょう」

「ゴメン。そうだね」

リョウは照れたように謝る。

それから歩くこと3分、ついに目当ての場所であるギルドにたどり着いた。

「すげー！」

予想以上にでかいな」

ギルドは東京ドームより少し大きいくらいだろう。

「そりゃ大都市ですからね。冒険者も多いんですよ」

「そっか、じゃ入ろうか」

「うむ」

「はい」

リヨウの言葉にリズとレナが頷き、リヨウはギルドのドアを開ける。

「すいませーん」

中に入ると同時にリヨウは声をかける。

すると中にいる、いかつい顔の男達の視線が一斉にリヨウに注がれる。

うわぁこえーと思いつつも舐められてはいけないと毅然とした態度で受付まで歩く。

よく視線を観察すると、リヨウを品定めする視線と同じ数の厭らしい視線がリズとレナに注がれる。

それはそうだとリヨウは思う。

人化したリズとレナは、百人に聞いたら百人がそうだと言うこと間違いないの美貌なのだ。

そのような視線を集めることは当然と言えば当然だった。

しかし、理解することと納得することは違う。リヨウ今にもリズとレナに厭らしい視線を送っているカスどもを排除してしまいたい気分になるが、理性を総動員させ押さえ付けている。

そして無理矢理作ったような冷静な声と表情で受付の人に言う。

「二人の冒険者登録と換金をお願いします」

「はい、わかりました。冒険者登録ですね。」

ではここに名前などの必要事項を書いてください」

リヨウは書類のような紙を手渡される。

それをリズと共にどんどん埋めていく。

「書き終わりました」

「はい。では最後にここに血を一滴垂らしてください」

「はい。じゃあこれで」

リヨウが血を垂らす、そしてリズもリヨウを見ながら同じようにする。

「ありがとうございます。これで冒険者登録は完了です。」

えーリヨウさん、リズさん、互いにFランクからのスタートとなります。

頑張ってください」

受付の女性の笑顔にリョウも笑顔で礼を言う。

「ありがとうございます。」

じゃあ次、換金の方をお願いしてもいいですか？」

「はい。ではお出し下さい」

「えーと、これです」

そういつてリョウはバック（自称四次元ポケット）から換金するつもりだった、剣獣の森で討伐した魔獣の素材をだす。

すると、受付の女性は目を丸くした。

「こ、これは！！」

巨爪熊の爪に大牙狼の牙、白虎の毛皮、それに龍骸や龍玉まで！！
これ全部剣獣の森の、しかも最深部じゃないと手に入らないもの……
ちょ、ちょっと待っててください」

そういつて慌ててギルドの奥へと戻っていく。

しばらくして、戻ってきた女性はリョウに言った。

「ギルド長があなたをお待ちなので来ていただけないでしょうか、
換金のことでお話が……」

「え、話し？」

この奥ですか？」

「はい。」

何かご都合が悪いのでしょうか」

「いえ、この二人も連れていってもいいでしょうか」

リヨウはリズとレナの方に視線を促す。

「はい。大丈夫です」

「わかりました。

では行きましょう」

受付の奥の部屋のドアを開けるとそこにはギルド長がいた。

そしてギルド長は開口一番、

「これらはお前が一人でとったのか？」

リヨウが渡した素材を指差して言う。

「一人で取ったのもあれば、ここにいるリズと二人で取ったのもありますが、それがどうかしたんですか？」

後、人になにかを聞くときはまず自分から名乗った方がいいですよ」

リヨウは少し強めな声で言う。

「ふむ。

ただの青二才ではないようだな。
遅れてすまない。

私はルドルフ・シュタイン
このギルドのギルド長を勤めている」

「俺はリヨウ・エンドウです。
こっちはリズ

こちらはご存知だと思いますがレナです」

ギルド長はレナを見て眉を吊り上げる。

「レナ、お前クエストはどうした？

アレンとロッドはどこにいる？」

ルドルフがレナに尋ね、レナはこれまでのことを全て伝えた。

アレンとロッドがランド盗賊団の一員だったこと

クエストには成功したが痺れ薬を盛られ奴隷にされそうになったこと

そこにリヨウとリズが現れ、リヨウが盗賊団を全滅させたこと……

そこまで話したところでルドルフが口を開いた

「アレンとロッドが……」

レナ、その話は本当か？

その少年が全滅させたという話しも」

「はい、本当です。

私はリヨウさんに命を救われたのです」

「分かった。

その話はとりあえず信じよう。

だがその変わりテストをしてもらう。

Cランク昇進クエストだ」

「C!？」

レナが驚く。

リヨウはポカンとしている。

「そうだ。

それだけの実力があればCランクは超えるだろう

合格すればもちろんCランクに昇進させる

しかし、合格できなければ、これまでの話しは嘘と判断して、詐欺罪として拘束、換金も行わない

試験官はこちらでつける。

クエストは甲殻獣の討伐だ

成功すれば、換金とクエスト報酬をあわせ金貨20枚やろう」

「に、にじゅう!？」

リヨウの隣でレナが驚いている。

リヨウはしばし考えるが、すぐに答える。

「分かりました。

受けましょう。というか拒否権はないみたいですしね」

こうして急遽、リヨウのCランク昇格試験が決まった。

リヨウは長の部屋をでた瞬間大きくため息をついた。

「どうしてこうなっちゃったんだ」

「まあ良いではないか。
おもしろそうじゃから」

リズのフォローになっていない一言を聞き、再び軽くため息をつく。

数分後、ルドルフが来て、リヨウのCランク昇格試験とその試験官として数名が発表された。

ここで一つ事件が起きた。

ギルドにいた者が一斉にリヨウに突っ掛かったのだ。

それは仕方のないことだったのかもしれない。

二人の美女を囲っているのも一つの理由だろう。

一人は銀髪の美女、そしてもう一人はなんと自分達がいくら口説いたり仲間に誘っても、微塵も毅然とした態度をくずさず、堅物とし

て男共に知られているレナだったのだ。

そこまで恵まれた境遇にもかかわらず、いきなりのCランク昇格試験。

リヨウのことを知らない者達からすれば、苦勞もせずは何らかの方法をとって昇格試験を得たと思うのは当然だろう。

そのような理由で、リヨウを20人程度の男達が、それぞれ、「この糞ガキがあ」、「ふざけてんじゃねーぞ」や「調子乗ってんじゃねーぞ」と言いながら囲っていた。

いつもだったら説得を試みるリヨウだが今回はそうしなかった。

リヨウは正直めんどくさくなってきてしまっていた。

一応、旅館にとまる代金程度は換金してもらったので、（剣獣の森を抜けてから出会った魔獣達の素材で）一刻もはやく、約一年振りの柔らかな布団で寝たかったのだ。

だから、最初は無視してギルドを出ようとした。

だが、それによって余計に怒りを増したやつらがリヨウに飛び掛かってきた。

誰もが目を背けようとしたがその必要はなかった。

そこに広がっていたのは、床に膝をついている（中には床に転がっている者もいたが……）男達の姿だった。

ギルド（後書き）

またまた嬉しいお知らせ

2000ユニークO ($\cong \nabla \cong$) O

これからも応援よろしくお願いします。

今回の話しでついにリシュテインに行けました。
長かった……………

ここからどんどん物語を加速させていくつもりです。

ヒロイン3人目が出るのはもうちょつと後かな……………

学校が始まってしまったので、投稿できない日があるかもしれませんのでご了承ください。

次回

男達にリョウな何をしたのか？
是非予想してみてください。
Cランク昇格試験もあります。

甲殻獣とはなんなのか？

では、
感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

Cランク昇格試験 一試験前夜から出発まで 一（前書き）

今回は短いです。

Cランク昇格試験　―試験前夜から出発まで―

「一体何が………!？」

ギルドの受付の女性、ルアは驚きを口にする。

リヨウを中心に、円周上に男達が膝をついている。

「この人数をたった一瞬で……」

「く……あいつ、なにしやがった」

「動けねえ、一体どうしちゃったんだ!!」

膝をついている男達や、周りの野次馬達からも突然起こった異常事態に疑問の声を上げる。

当事者ですら理解できない事態が進行しているのだ。

そんな中を、一刻も早く宿に帰りたいリヨウはリズとレナを連れて悠々とギルドの外へと歩いていく。

人々の興味津々な視線や、恨むような視線などを一身に背負いながらも全く動じることなく歩みを進める。

さて、今リヨウは何をしたのだろうか。

正解は《破壊》だ。

加速や治癒とは違うこの世界に来てから初めて遭遇した敵に放ったものと同じ完全なる破壊の力

破壊には二種類のやり方がある。

一つは生命エネルギーの異常活性によって肉体が抑え切れる量を超え、部位が爆ぜる《爆砕》

威力が強く、発動が速いのが利点だが、単体にしかかけられないのが欠点だ。

盗賊団のリーダーにやったのがこれだ。

もう一つは、生命エネルギーの異常低下により壊死したような状態になる《安楽》

《安楽》の利点は手加減できる点、複数に同時にかけることができる点、標的の身体全体に干渉できるという点だ。

しかし、利点ばかりではない欠点もある。

それは発動までに時間がかかる点だ。

今回は襲い掛かる前から準備をしておき、襲い掛かってきた瞬間男達の生命エネルギーを気絶する寸前にまで低下させたのだ。

それにもかかわらず倒れるものより、膝をつく者のほうが多かったのは、その冒険者のレベルが高い証拠であろう。

もちろんリヨウには手も足もでなかったが……

そしていくつもの視線を背にギルドをでる。

それからしばらくして、リヨウは二人に話しかける。

「リズ、レナ、これから宿二部屋とるつもりだけど二人は同じでいいよね」

「うむ。異論はないぞ、主殿と一緒にしないのが不満じゃが」

「はい。問題ありません」

宿への道を足速に歩きながら二人に確認をとる。

そうこうしているうちに、ついに目的の宿へ到着する。

「やっと着いた」

すいませーん。

泊まりで二部屋お願いしたいんですけど」

宿の奥から女の人が出てきて、応対してくれた。

「はい

わかりました。206と207号室の二部屋で銅貨80枚になります

す」

「はい。これで」

そう言って銅貨が入っている袋を渡す。

「ありがとうございます。

お釣りの銅貨20枚と部屋の鍵になります。」

リヨウはお釣りと鍵を手渡され、部屋へと向かう。

部屋は2階に二部屋、隣同士でリズとレナは鍵を渡され、もう既に自分達の部屋に向かった。

リヨウも部屋へと入る。

部屋は広くはないが狭くもない。

そして、テーブルとベッドがおかれているだけだ。

ところが、ベッドがとても気持ち良さそうなのだ。

思わずリヨウは、

「やつわらか〜い布団ヘー、レッツダーク！
と、大きな声で言いながら飛び込む。

「あーもう明日の事とか力の事とかどうでもいいや。
何もかも忘れて寝まろう」

そう言ってリヨウは即行で眠りについた。

久しぶりの熟睡だった。。。

その頃207号室のリズとレナは……………

「ほう〜これがベッドというものか。

ふかふかじゃなく〜」

ベッドの上でジャンプしながらリズが言った。

「リズさんはベッド使ったことないんですか？」

「うむ。まあそうじゃな

ずっと天界におったし、下界に下りてからも主殿と共に森におった
からのう」

「ずっと聞こうと思ってたんですが……………。
リヨウさんと『二人』でですか!？」

「おう。そうじゃが？」

「ふた…りきりって……………」

まさかあんなことやこんなことを・・・」

「ん？」

我は魔獣を討伐したり主殿の修業を手伝ったりしてただけだが」

「え？それだけですか？」

レナは拍子抜けした声をだす。

「ふふふ、何を想像したのかのう」

リズが意地の悪い笑みを浮かべる。

「え、え？あのうーそのうー」

レナの顔は急激に真っ赤になり耳まで染まってしまった。

「まあしたがな」

リズの爆弾発言に驚きながらツツコム。

そして絶対零度の声で言う。

「したんですか？」

「どうした？」

何かお主に困ることでもあるのか？

………っ！！

まさか主殿に惚れて………」

「っっ！！」

いえ、まだそんな気持ちは！」

さっきまでの表情とは打って変わって、レナはあわあわとテンパッ

ていた。

リズはそんなレナの様子を微笑ましく見ながら言った、

「ふふ、まあいいわ。

そろそろ寝ようかの」

「そうですね。

お休みなさい」

「うむ。おやすみ」

こうして三人は眠りについた。

そして翌日、ついにリョウのCランク昇格試験の日がやってきた。

「さようなら。フワフワ布団よ。行ってきます。また会おう」

と言ってリョウは部屋をでてリズとレナの二人と合流し、ギルドへ向かう。

ギルドに着くとそこにはギルド長ルドルフ、受付のルア。

試験官のゼス、マルタ、ネルの三人。

そして野次馬達がいた、野次馬の中には昨日リョウに飛び掛かり返

り討ちにされたやつもいた。

「これからリヨウ・エンドウのCランク昇格試験を行う。
同行者はリズ、レナ、ゼス、マルタ、ネル
討伐目標は甲殻獣、鉄鋼蟹2体だ。
では、Cランク昇格試験開始!!」

（それにしても随分と注目されちまったな〜
さっさと終わらせて帰ろうっと）

リヨウは短絡的に考えていた。

そして、その時まだリヨウは知らなかった。

この試験で起こることがこれからユストラシア大陸に訪れる未曾有
の危機の前触れだったことに……………

Cランク昇格試験 一試験前夜から出発まで一（後書き）

第二章を四部構成にするつもりです。

一部目が終わったので次回からは第二部のCランク昇格試験編スタートです。

キリが良さを優先したので、今回は短くなってしまいました。
それに戦闘入んなかった。

次回は戦闘入るはず………入れるといいな

次回予告

ついに始まったCランク昇格試験。

今だ戦った事のない甲殻獣とどう戦うのか………

では、

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

Cランク昇格試験―鉄鋼蟹、そして急変―

リヨウはこの世界に来てリズと出会うまでの半年間を森で一人孤独に過ごしていた。

しかし、それは決して一人が好きというわけではない。

どちらかというと賑やかな方が好きだった。

だから今この状況はリヨウにとって非常に耐えがたいものだった。

何がいけなかったのかと考え昨日の記憶にたどり着く。

昨日あまりの疲れに相手に《破壊》を使ってしまったこと。

あの時もっと平和的な解決をすれば良かったといまさらながらに後悔する。

何故今こんなことを考えているのかというと、

現在の状況

討伐地点に向かう馬車の中、試験官であるゼス、マルタ、ネルは一言も喋らず、時々リヨウに警戒心に少し恐怖を孕んだ視線を向けてくる。

そしてその三人視線を見て、不機嫌になり何も話そうとしないリズとレナ

（気まずい。非常に気まずい。何か話題を考えなければ……）

リヨウはそう思い必死に話題を探す。

「あ、あの〜」

リヨウが声をあげるとギロリと目を向けてくる五人。

「いえ、何でもないです」

その視線にヘタレボーイであるリヨウは咄嗟に緊急避難をしてしまう。

しかし、やはりこの気まずさに耐えられないリヨウは勇気を振り絞ってとりあえず会話を繋げる。

「いや、何でもなくなくて、甲殻獣ってどんな魔獣なんですか？」

緊張してしまい、敬語になるリヨウ。

「甲殻獣は体表面が非常に強化された防御力が高いのが特徴の魔獣だ」

ゼスが答える。

リヨウは返答が来たことが嬉しく、この空気を打開できるのではないかと思ったが残念ながらその後会話が続くことはなかった。

それから馬車で走ることに10分、ついに鉄鋼蟹が出没するというポイントに到達した。

確かにそこには情報通り三体の鉄鋼蟹がいた。

「じゃあ行ってきます！」

リヨウは伸びをしながらそう言うのと鉄鋼蟹へ向けて走り出す。

そして《破壊》で右手の生命エネルギーを活性化

ザコ魔獣程度であれば一撃で葬ることのできる拳が鉄鋼蟹へ向けて放たれる。

ガキン！！

鉄を叩いたような音が周囲にこだまする。

「ザコじゃないってことかWW」

鉄鋼蟹の体には傷一つついていなかった。

リヨウは苦笑いしながら考える。

「うーん。

どれくらいなら割れるかな」

今度はさっきの二倍の生命活性を行い、再び殴り掛かる。

再び鉄を叩いたような音が響く。

今度はほんの少しだけ傷がついた。

オー、トリヨウが感動していると、二匹の鉄鋼蟹がトリヨウを視認し、向かってきた。

それを冷静に見ながらトリヨウは唱える。

アクセル

「《加速》」

結果、難無く避けることができた。

蟹の攻撃はたいして速くはなかった。

今はアクセルを使ったが、使わずとも回避できるほどのスピードだ。

リヨウはこれらの事を総合して、こいつらは己の脅威にはならないと判断した。

「もうお前らには用はない
行くぞ！」

そう言って足の生命力を活性し、ジャンプする。

蟹の頭上5メートルくらいまで跳び上がり、降下の勢いをのせ、一気に拳を振り落とす。

瞬間、今までで一番大きい音が周囲に鳴り響いた。

しかし今度はこれまでと同じ鉄を叩く音ではない。

鉄を打ち砕く音だった。

体を覆う鋼鉄の殻を砕かれ、そのまま体に大きな穴が空け、その鉄鋼蟹は生き絶える。

仲間の死を知った二匹の蟹が唸り声をあげリョウに迫る。

だが、リョウはあくまで冷静に頭上に跳び拳を振り落とし蟹を容赦無く叩き割る。

これらが蟹と遭遇してからたった2分で行われた出来事だった。

――side 観客――

この戦いの観客であるリズ、レナ、ゼス、マルタ、ネルはそれぞれ異なる反応を見せていた。

リズは当然だという表情を浮かべている。

レナは最初はリョウの規格外な実力は何度目か分からない驚きを感じていたが、だんだん落ち着き、ただただ凄いなあという表情を

浮かべていた。

そしてゼス、マルタ、ネルの三人は仲良く一緒に目を大きく見開き、顎が地面に着くんじやないかと思われるほど口をあんどりと開けていた。

それは当然のことかもしれない。

ここで魔獣について少し説明しておこう。

BからDランクの魔獣は主に三種類あり、それぞれ特徴的なパラメータを持っている。

パラメータも力・スピード・防御力の三種類がある。

まず一種類目は巨爪熊などの剣獣と呼ばれる種族

この種族はスピードと力のパラメータが高く、防御力は低い。

そして今、リヨウが余裕で叩き潰していた鉄鋼蟹を含む甲殻獣という種族は、力と防御力のパラメータが高く、スピードは低い。

Cランクの鉄鋼蟹だがその防御力はBランク並なのだ。

本来の戦い方はスピードが遅いのを利用してヒットアウェイで同じ部分を攻撃しまくるというものだ。

もちろん、時間はかかるが、命がかかっている以上冒険はできない。あくまで堅実に、が冒険者の鉄則なのだ。

だから最初三人はリョウがふざけているのだと思っていた。

いくら、ギルドで正体不明の技を使っただと言っても、所詮は人間。腕力で鉄を割れる訳がない。

しかも防具も着けていない。

完全に初心者のがきだと、三人は結論づけた。

鉄鋼蟹を甘く見ているのだと

しかし、その考えは数分後改められていた。

驚愕という形で……

リョウが素手で鉄鋼蟹の殻を叩き割ったのだ。

魔法のアシストを使ったのかと、必死に魔法の残滓を探すが見つからない。

リョウが魔法を使った形跡は無いのだ。

《破壊》の存在を知らない三人にとって、魔法のアシストも無く、グローブのような武器も見当たらないこの状況。

リョウが己の腕力で鉄鋼蟹の殻を叩き割ったという結論しか出せなかった。

そして、そんなことは有り得ないという思いと、たった今自らの目の前で起きたんだから現実だという正反対の思いが、頭の中で駆け巡り、思考が混濁し、フリーズしてしまっていた。

そしてその硬直が溶けたのはリョウのこれまで聞いたことのないほどの鋭い声を聞いた時だった。

――side out――

リョウは鉄鋼蟹を叩き潰した後も安心していなかった。

まだ何かいる……

そしてそれは充分脅威と言ってもいいほどの威圧感を放っていた。

しかも恐らく一匹じゃない。

リョウは二もなく撤退を選択した。

リョウは森で効率の良い職滅の方法と自分を守ることだけを極めて

きた。

途中からリズもいたが、充分戦力になり、足手まといにはならず、心配する必要は全くなかった。

何を言いたいのかというと、リョウは自分以外の誰かを守りながら戦う事には慣れていないのだ。

リズは心配ない。

レナも暗殺魔法の隠密性を発揮すれば逃げることは可能だろう。

問題は試験官の三人だ。

それなりに実力はあるようだが、まだ弱い。

流石に三人を守りながら戦うのは難しいだろう。

そう考え、リョウはみんなに聞こえるような鋭い声で、早く馬車に戻れと言った。

リズも気配は察知していたようで、一瞬でリョウの考えを把握し、頷く。

そして馬車に連れていこうと先導する。

だが、フリーズしていた三人は何がなんだか分からずアタフタしてしまい、馬車に向かうのが一瞬遅れてしまった。

そしてその一瞬が命取りだった。

気配が、リズほどではないが、かなりのスピードで接近し、リョウ達と馬車の間にあたかも阻むように現れた。

「うそ………だろ」

その姿を見てゼスが呻く。

レナ、マルタ、ネルは顔を青くしている。

そこにいたのは、剣獣の王と呼ばれているAランクの魔獣、王獅子だった。

Cランク昇格試験－鉄鋼蟹、そして急変－（後書き）

今回の話で魔獣について触れましたが、あと一種類はこの先出すのでそれまでお楽しみにということで（笑）

明日は投稿できるか分からないのでご了承ください。

次回

リョウ達の前に現れた王獅子、そして次々に現れる高ランクの魔獣達。

リョウ達は生きて帰れるのか……………

では、

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

Cランク昇格試験－襲撃－（前書き）

書き上がりました。

Cランク昇格試験―襲撃―

「王獅子？」

リョウはゼスに聞く。

「王獅子は剣獣の中でも最上級の魔獣だ。

ここは甲殻獣のテリトリーのはず、なんで剣獣がいるんだ！
それも王だなんて」

「王？」

「ああ、Aランク相当のスピードを持つため、剣獣の王と呼ばれて
います」

今度はマルタが答えた。

リョウはリズを見て問う。

リズは天狼、速さの代名詞のようなものだ。

「リズ、どうする？」

「うむ。

我らだけで問題ないじゃろ。
他の奴は足手まといじゃ」

「なに！？

俺達が足手まといだと！」

リズの一言にネルがキレる。

だが、リズは済ました顔で言う。

「事実じゃ」

「俺達はB+だ。そのガキの方が足手まといじゃないのか」

こうした口論が繰り広げられている間、リョウは王獅子を見ていた。

何故か王獅子は動かない。

本来であればすぐに襲って来るはずだ。

しかしそうしない。

まるで何かを待っているかのように……………

（まさかっ！）

リョウがある結論にたどり着いた時、事態はさらに急変した。

リョウが恐れていた事態に……………

王獅子の背後から10体以上の剣獣が、

そしてリョウ達の背後からは甲殻獣が現れた。

「一体なんなんだ！」

ゼスが泣きそうな声で叫ぶ。

王獅子だけならばまだ勝ち目はあった。

しかし今は数が多すぎる。

さらに後方の甲殻獣の群れを率いていたのは、大甲亀だった。

大甲亀の防御力はAランクだ。

並大抵の攻撃では傷一つ付けられない。

鉄鋼蟹とは格が違うのだ。

この状況は、もはやSランク相当のクエストになっている。

ただのCランク昇格試験がいきなりSランク相当のものになってしまったのだ。

ゼス、マルタ、ネルの三人は自分達がB+であることに誇りを持っていた。

しかし、たかがB+がSランククエストを成功できるわけがない。

三人は顔を蒼白にし、恐怖に震えている。

レナも顔を青ざめさせている。

その中でリョウとリズは眉一つ動かさずに状況を凝視している。

まず考えなければならないのは、まだ隠れている魔獣がいるかということ。

これにはサーチを飛ばすことで、サーチ圏内にはこれ以上魔獣はい

ないことが分かった。

しかし、いつさらに魔獣が来るか分からないため、できるだけ早く終わらさねばいけない。

そしてついに動きがあった。

準備を終えたのか理由は分からないが、魔獣がリョウ達に襲い掛かってきたのだ。

「「「ひい！」」」

三人から恐怖の声が上がる。

しかし、魔獣の攻撃は通らなかった。

突然彼等を覆うように土のドームが出現したからだ。

「な、なんだ!?!」

突然の事態に誰かが声を上げる。

ドームを作ったのはリョウだった。

「安心してください。

これは俺がやったことです」

「これを!?!」

少なくとも下位魔法じゃない。
中位以上を詠唱なしだと!」

ゼスが驚愕の声をあげる。

だが彼はこれからさらに驚愕することになった。
リヨウの言葉によって

「これから俺とリズはこのドームをでて魔獣達を殲滅してくる。
あなた達はここから出ないようにして欲しい。
もし出た場合、命の保証はできない」

リヨウは極めて冷静に言った。

「なんだと!？」

またしてもネルが食い下がる。

つい昨日冒険者になったようなやつがAランクの魔獣に勝てるわけがないと思ったからだ。

しかしリヨウはスルーし、皆の顔を見まわす。

そしてレナと目があつた。

「あの！

わ、私はどうしたら………」

これまで一言もしゃべらなかつたレナが口を開く。

「レナはここに残っていてもらう」

「それは私が足手まといということですか？」

レナは顔を暗くする。

それでもリヨウは言う。

「レナはこの戦いには向いてない。

俺は死者をだしたくないんだ。

そこの三人がドームから出ないように見張っていてくれ。
すぐに帰ってくる」

レナはしばらく考え、頷く。

「分かりました。

きをつけて……」

話が終わったところでリヨウとリズは外に出た。

三人は未だ納得していないようで何か言っていたようだが、構わずに行く。

リヨウ side

「リズ、ザコを頼む。

俺は獅子と亀をやる」

「うむ、分かった。

では、行くかの。人化解除」

リズは人型から本来の姿である天狼の姿へと変わる。

そして、リヨウも再び己の敵へと目を向ける。

そして声高らかに叫ぶ。

アクセル

「いくぞ！ 《加速》」

リヨウはまず王獅子に狙いを定め、距離を詰める。

そして軽くパンチを放つが、避けられてしまう。

まさかこの速さについていけるとは思わず、思わぬ事態にリヨウは少し驚く。

「流石に油断しすぎたか。

なら、これでどうだ

創造、《斬波刀》」

リヨウの手に2メートルもの刀身を持つ太刀が現れた。

これはリヨウの愛刀だが、森をでてからはたいした敵も現れず、使っていないかった。

そして、それを使ったということは、これからはリヨウも本気ということだ。

「まずは、《斬風》」

斬波刀には属性を付加させることができる。

そしてそれぞれで向寒の候が変わってくる。

風を付加させた場合、刀の斬撃速度が数倍にあがるのだ。

さらに加速と同時に放った斬撃は一瞬の煌めきとともに、周囲の物を切り刻み、吹き飛ばす。

だが流石にAランクに近いだけはある。

他の魔獣が次々と旋風に巻き込まれ、体を切り刻まれ死に絶える中でまだその強靱な足は地を踏んでいた。

ダメージは受けているため後何発かで倒せるという目処が立っていた。

しかし、現実はそう甘くない。

リョウの背後に控えていた甲殻獣の軍勢が向かって来たのだ。

そして先頭の大甲亀の一撃がリョウに迫る。

リョウは攻撃がミートする直前、斬波刀に雷を付加した《斬雷》を放つ。

雷を付加した刀身は強度が増し、相手の攻撃を受け止めるのに有効だ。

さらに、カウンター攻撃に繋げることもできる。

自分の一撃を防がれ、驚いたようなうめき声が辺りに響く。

そして亀がのけ反ったところでカウンターをヒットさせる。

だが、クリーンヒットしたにもかかわらず、一撃で沈めることはできなかった。

流石、防御力を誇る甲殻獣の最上級魔獣だけはある。

そんな思考もつかの間、王獅子が後ろから飛び掛かって来る。

上体を右にずらし、最小限の動きで攻撃を避ける。

片方はスピードに、もう片方は防御力、すなわち耐久性が高いという組み合わせは非常に厄介だった。

だが幸い、というか自分でそうしたのだがリズ以外リョウを見ているものはいない。

そしてリョウが出した結論

それは創造魔法を使い、一撃で葬り去ることだった。

リズ side

一方、その頃リズは剣獣3体と甲殻獣4体を相手にしていた。

剣獣をその爪で次々と切り刻んでいく。

剣獣の強みはスピードだ。

しかし、そのスピードはリズの足元にも及ばない。

スピードが意味を成さない今、剣獣はなすすべもない。

剣獣の雄叫びと断末魔の叫び声が鳴り続けている。

ほんの数分で剣獣の群れは一片の肉も残らず切り刻まれた。

甲殻獣はリズの目の前にいる4体以外はリョウと王獅子、大甲亀との戦闘に巻き込まれ、生き絶えていた。

装甲が固いため剣獣のように簡単には切れなかったが、それでも所詮はCランク。

天狼の敵ではない。

ただ今度は切るのではなく割るだった。

天界の生物の中でもスピードに勝る天狼といえども、力が弱いわけではない。

B、Cランクの甲殻獣の装甲を叩き割るぐらい造作もないことだった。

こうして、Bランク以下の冒険者なら全滅を免れないだろう7体の魔獣はたった数分で生き絶えた。

リョウ side

リョウは目の前の二体のAランク魔獣、王獅子と大甲亀に創造魔法を行使することにした。

創造魔法とは、リョウの完全オリジナル技だ。

そしてこの魔法は別の言い方に言い換えることができる。

それは殲滅魔法。

全てが上位魔法以上の力を持っているという、まさに究極の魔法。

リョウはリズに声をかける。

「リズ、来てくれ」

「なんじゃ？」

「あれをぶちかますからな。
巻き込まれるかもしれない。念のためだ」

「あれか、あれは反則級じゃぞ」

リズが苦笑しながらいう。

「そろそろ終わりにしなきゃね。ちょっと気になることもあるし」

「気になること？」

後で説明するんじゃないぞ」

リズがジト目で言う。

「分かった分かった」

リヨウは笑いながら言う。

だが、それも一瞬のことだった。

動き出した魔獣を向いたリヨウの顔にはすでに笑みはなかった。

そしてリヨウは唱える。

「創造、

全ては氷に閉ざされる。

そこに生は存在しない。

さあ氷結の世界を……

ニヴルヘイム

《氷結地獄》」

その瞬間世界が氷に包まれた。

Cランク昇格試験－襲撃－（後書き）

昨日は忙しかったので投稿できませんでした。

創造魔法をいつ出すかずっと迷っていましたが、今回でいれました。

次回予告

創造魔法を使ったりヨウ。

一体どうなるのか？

次回決着です。

では、

感想・評価・アドバイス・質問お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1143ba/>

エデン～創造と破壊～

2012年1月15日01時48分発行